関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

四神瓦当等の前漢長安城出土瓦当

著者	下間 頼一，緒方 正則
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	4
ページ	17-27
発行年	1998-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/16566

四神瓦当等の前漢長安城出土瓦当

下間頼一
緒方正則

一　瓦当試料

今回　御緑あって、関西大学博物館へ、前漢の長安城趾より出土した瓦当　三種　六個を寄贈させて頂くことになった。

㈠図象瓦当　四神瓦当

青龍文　一個　黒灰色　写真1a

※直径一一・八―一一・九㌢　厚さ二・二―二・三㌢

白虎文　一個　黒灰色　写真1b

直径一一・七―一一・八㌢　厚さ二・二㌢

朱雀文　一個　黒灰色　写真1c

直径一一・九―一二・一㌢　厚さ二・三㌢

玄武文　一個　黒灰色　写真1d

直径一二・〇―一二・二㌢　厚さ一・四㌢

これら四神瓦当と酷似する瓦当が、前漢長安城の南郊にある礼制建築群より出土したとの報告[1]がある。

㈡文字瓦当「長生無極」一個　黒灰色

直径一七・〇―一七・三㌢　厚さ二・七―三・〇㌢　写真2

いわゆる吉祥文瓦当は漢代の宮城遺趾より多数出土しているが、前漢長安城址よりの出土例としては、未央宮第二号遺址よりの出土が報告[2]されている。第二号遺址は、未央宮のほぼ中央に位置する前殿遺趾の北三三〇㍍、天禄閣遺址の南二七五㍍にある。二号遺趾よりの出土瓦当は、雲文・葵文・文字及び素面瓦当の四種類である。寸法は直径一九・六―二〇・六㌢である。文字瓦当には、「長楽未央」、「長生無極」及び「千秋萬歳」があった。その「長生無極」文瓦当は本資料とよく似ている。

㈢文字瓦当「衛」　一個　黒灰色

直径一四・三㌢～一四・四㌢　写真3

前漢長安城未央宮の西南角楼遺趾より「衛」字瓦当が出土した。[3]灰色で表面に未塗のあとがあり、直径一六㌢、厚さ一・六㌢

写真１　四神瓦当　ａ青龍文　ｂ白虎文　ｃ朱雀文　ｄ玄武文

写真2　吉祥文瓦当「長生無極」

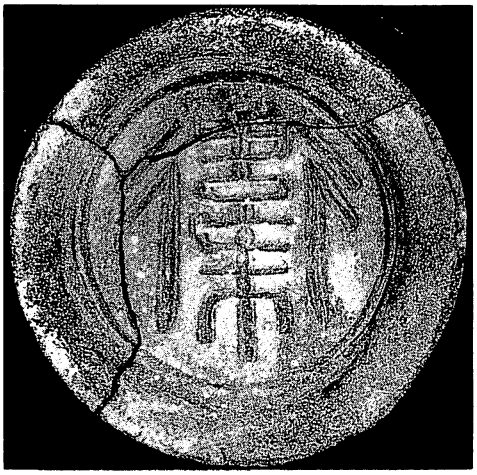

写真3　文字瓦当「衛」

二　前漢の長安城の概要

前漢の首都長安城は、人口約十万人弱、中国最大の政治・経済の中心都城であった。一九五六年の秋より大規模な発掘調査が営々として行われてきた。[4] 発掘された実測図を図1[5]に示す。

先ず城壁と城門が発掘された。[5] 城壁は版築の土墻で、東城壁は直縁であるが、他三城壁は屈折している。北城壁は北斗星形、南城壁は南斗星形に屈折している処より、俗に斗城と呼ばれた。[6] 城壁の長さは東城壁が五九四〇㍍、西城壁が四五五〇㍍である。屈折著しい北城壁と南城壁については、北城壁の東端より西端までの直線距離は五九五〇㍍、南城壁のそれは六二五〇㍍である。屈折に沿った正味の城壁総延長は二五一〇〇㍍に達する大都城であった。四方の城壁には各三城門があり、各城門には三門道があった。今日西安に屹立する明代城壁に見られる通りである。伝統技術の永い生命が感じられる。

周礼考工記に、「匠人営国、方九里、旁三門、国中九経九緯……」と。[6] 匠人が都城を営むときは、城壁をめぐらすこと方九里、四方の城壁に夫々三城門を設け、（各城門には三門道を設けるから）城内は縦横ともに九道が通じると。前漢の長安城は「周礼考工記」の制にもったものだという解釈がある。

前漢の高祖（在位前二〇六―前一九五　劉邦）の時、秦の離宮の興樂宮を基にして長樂宮に改築し、朝儀の場所とした。図2[7]に示すように、長樂宮の西に未央宮が造られ、未央宮の北に北宮が造営された。長樂宮

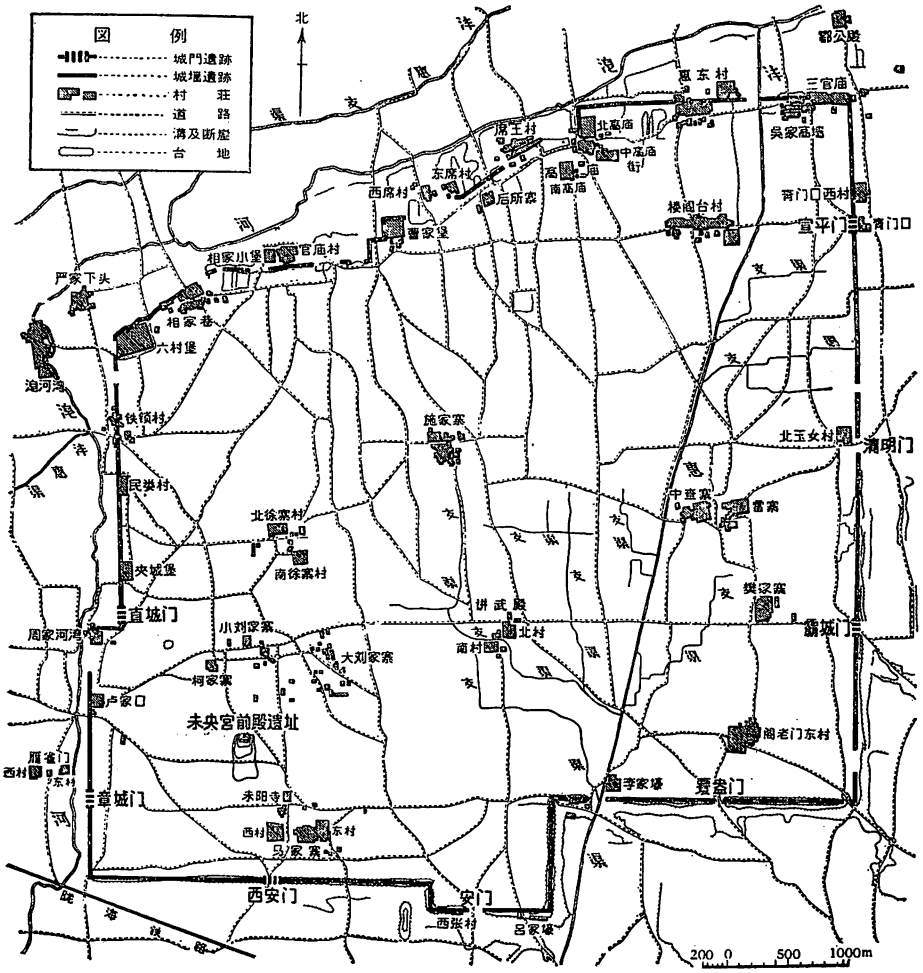

図１　西安西北郊の前漢長安城址の実測図

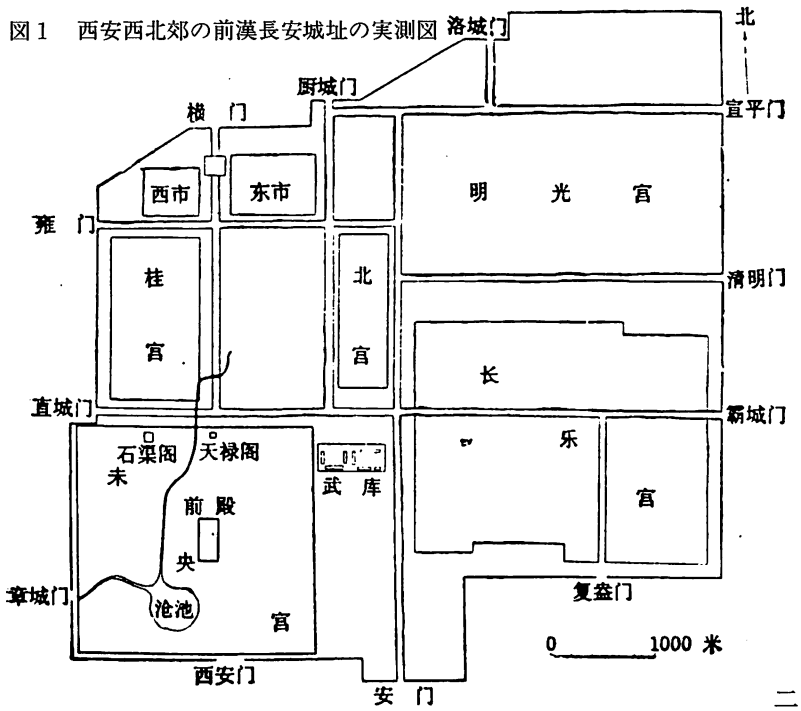

図２　前漢長安城の宮配置図

と未央宮の間に武庫が作られた。二代皇帝の恵帝（前一九五―前一八八）の時、四周の城壁が作られ、西市が設けられた。六代皇帝の武帝（前一四一―前八七）の時、城外西方に建章宮、長楽宮の北に明光宮、未央宮の北に桂宮が造営され、北宮が増修された。

長楽宮の四方には門があったが、闕（ケツ）は東門と西門にだけ設けられた。長楽宮内の宮殿は全て南向きであるが、長楽宮全体としては「坐西朝東」の構造である。伝統的構造が受継がれている。

未央宮も長楽宮と同様に「坐西朝東」の構造で、東門と北門とを正門とし、夫々東闕と北闕とが設けられた。「史記」高祖本紀の高祖八年（前一九九年）の条に「蕭丞相（漢創業の功臣蕭何）未央宮ヲ営作シ、東闕、北闕、前殿、武庫、太倉ヲ立ツ。高祖還リテ、宮闕ノ壮ナルヲ見、甚ダ怒ル」と。東闕は蒼龍闕、北闕は玄武闕とも呼ばれた。

闕は扉を闕（か）く門である。宮城門外の左右両側に設けた二個の台で、その上に楼観（物見）を置いた（諸橋先生の広漢和辞典による）。一方四川の漢代の闕は斗栱（キョウ）形の独特のもので装飾的である。今日内蒙古自治区の呼和浩特の南九キロメートルにある王昭君墓公園の入口に再現され、四川系の壮麗な楼観のある闕を見ることができる。

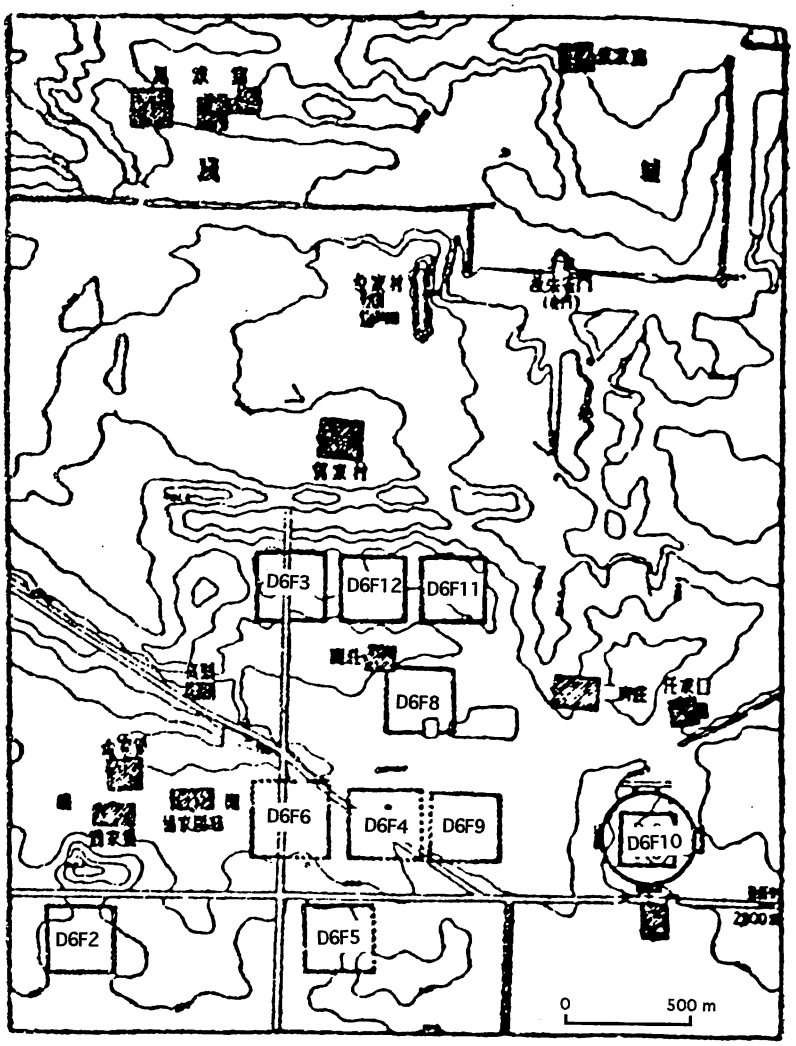

図3　前漢長安城南郊の礼制建築趾の地図

三　前漢長安城南郊の禮制建築群

四神瓦当は南郊の礼制建築群より出土例が報告されている。そこで南郊の礼制建築群の大要を述べよう。

一九五六年秋に前漢長安城の発掘が始ると、その南郊と東郊で当時の礼制建築物の遺跡が十数個所発見された。一九五七年の速報[1]によれば図3[1]の如く南郊礼制建築が報告されている。遺趾D6F4より龍文瓦当及び虎文瓦当が出土した。D6F9遺趾より朱雀文瓦当、D6F3遺趾より玄武文瓦当及び文字瓦当〝上林〟が出土したと報告されている。

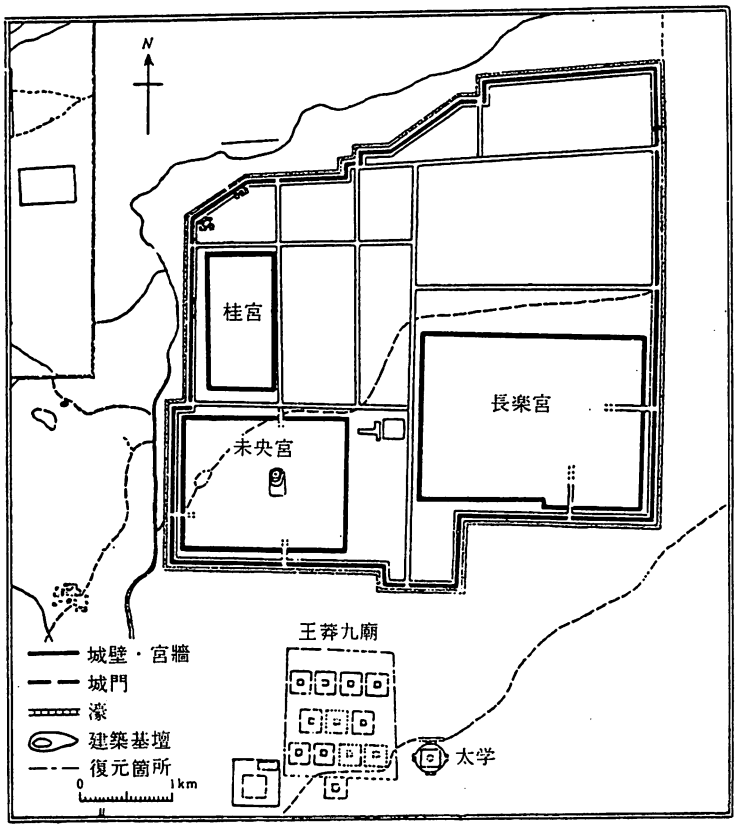

図4　前漢長安城及び南郊礼制建築群の地図

その後の詳しい[8]調査の結果、図4[8]に示すようにこれらはいわゆる〝王莽九廟〟と推考されている。さらに〝王莽九廟〟来南隅の東に独立して環池を有する遺趾が発見された。これは太学と考えられている。太学は国都にある天子の最高の学問所であり、辟雍ともいわれる。辟は天子、雍は学舎(まなびや)である。史記　封禅書に、「天子曰二明堂・辟雍一、諸侯曰二泮宮一」と。辟雍は天子の大学であって、周囲に円形の池水がめぐり、諸候の学校は泮池が備わっていると。

王莽の九廟は新（前四五―後二三）の王莽の祖宗の廟として設けられたものである。王莽は周礼の復興を政治の旨としたので、その九廟も又周礼にのっとったと考えられる。

太学遺趾は、前漢の長安城の南斗形をした南の城壁の南の尖出部にある安門から南へ一キロメートルの地点の東側にある。文献⑧によれば、「円形の基壇をもつ方形の殿堂で、四方に各一門をもつ大きな方形の廟園の中央に据えられており、廟園を取り囲む宮牆(しょう)の外側には、さらに園水溝が巡らされていた。殿堂は建築組成の主体となり、それは当時の太学の講堂と考えられる。」と。図5[9]の復元鳥瞰図に一目瞭然である。環水地の直径は約三七〇メートル余である。中心建築の詳細を図6・7[9]に示す。

長安城に明堂や雍堂がが建てられた時期は明確ではないが、前漢の武帝の紀元前一〇六年頃建てられたようで、王莽の新が紀元後四年に明堂と辟雍を建てたことは文献ばかりでなく鎮の銘文にも見える。[6]

これらの建築群は「天地に体象し、陰陽に経緯する」形象をとり、

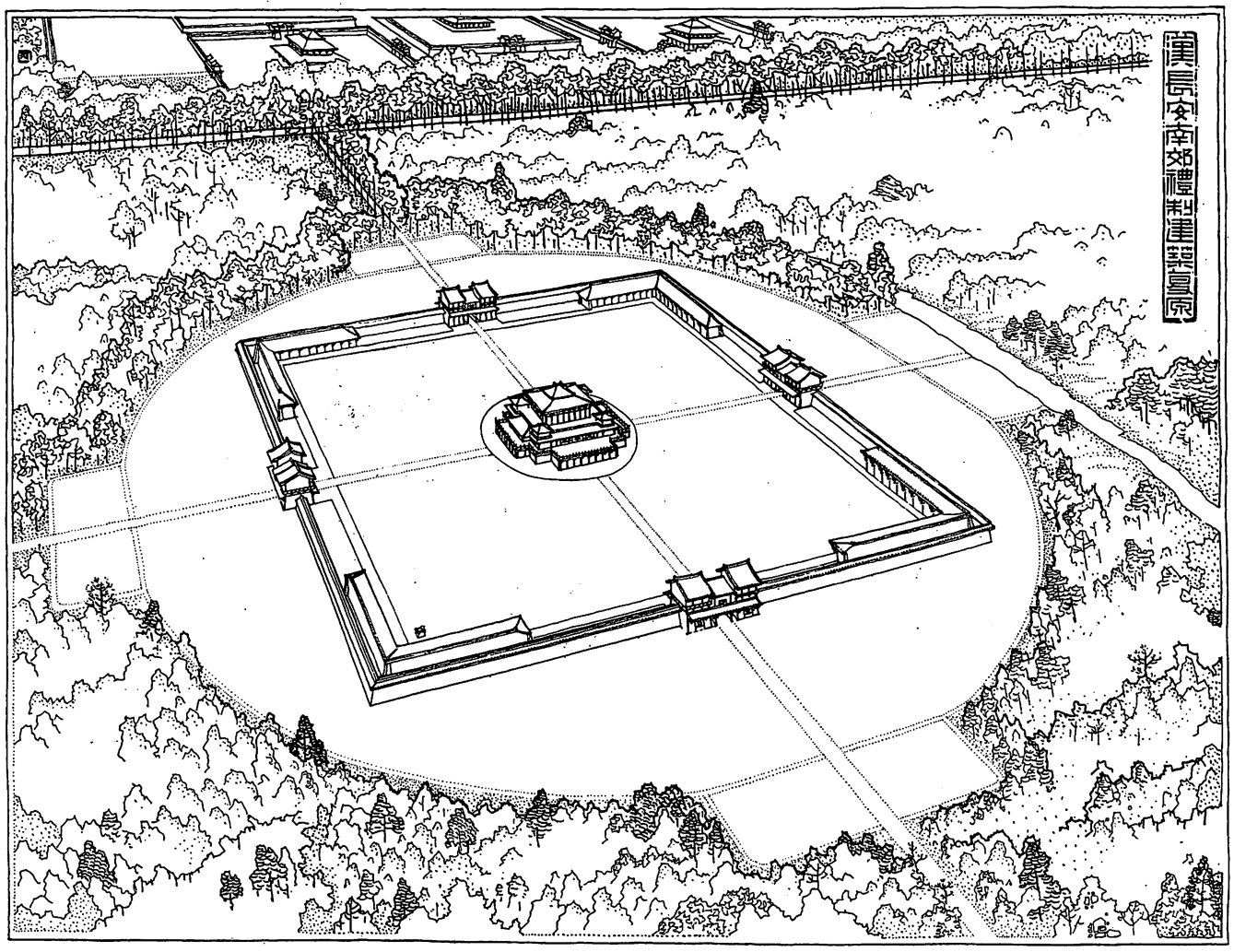

図５　前漢長安城南郊の礼制建築の復原全景図

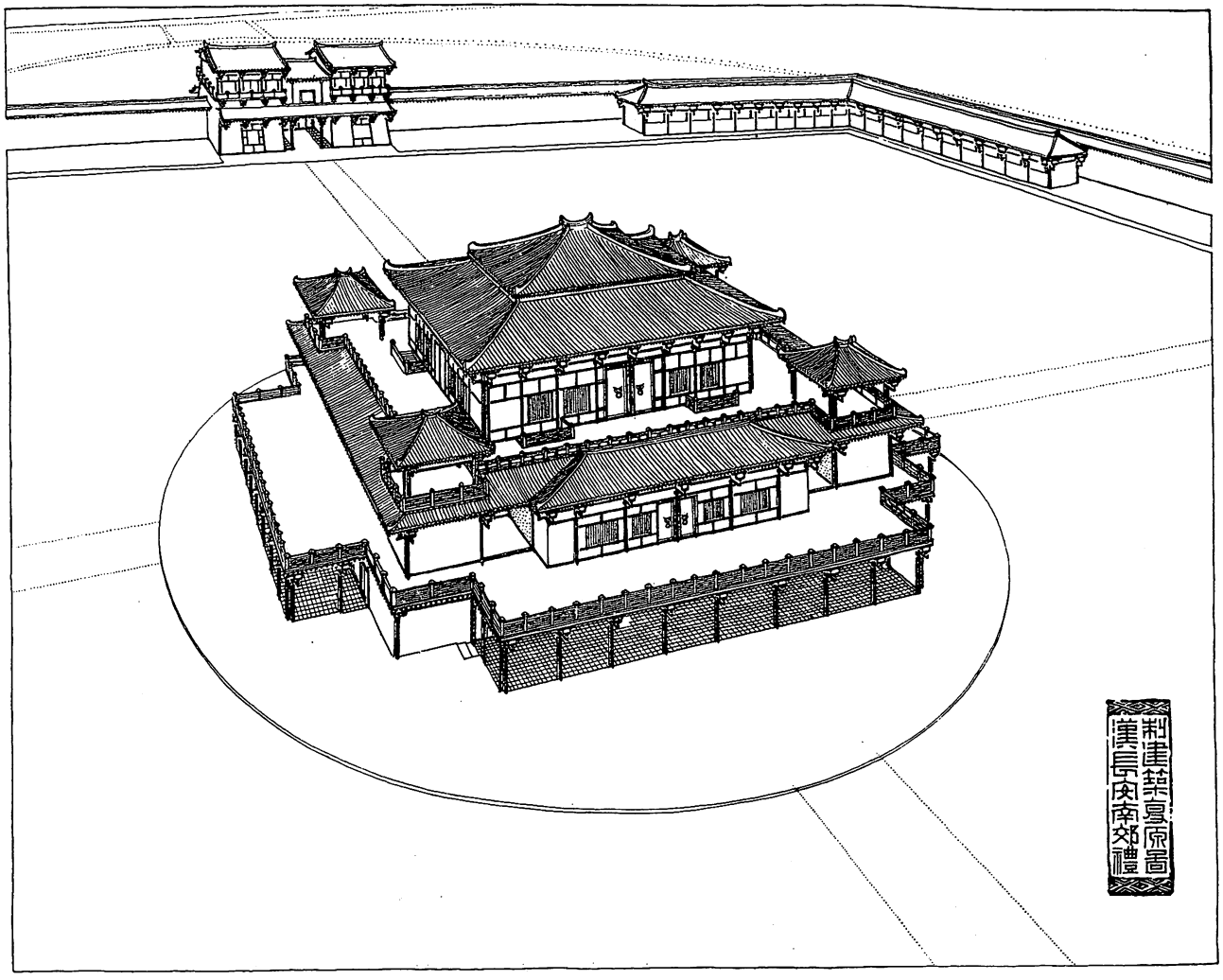

図6　前漢長安城南郊の礼制建築の中べ建築復原図

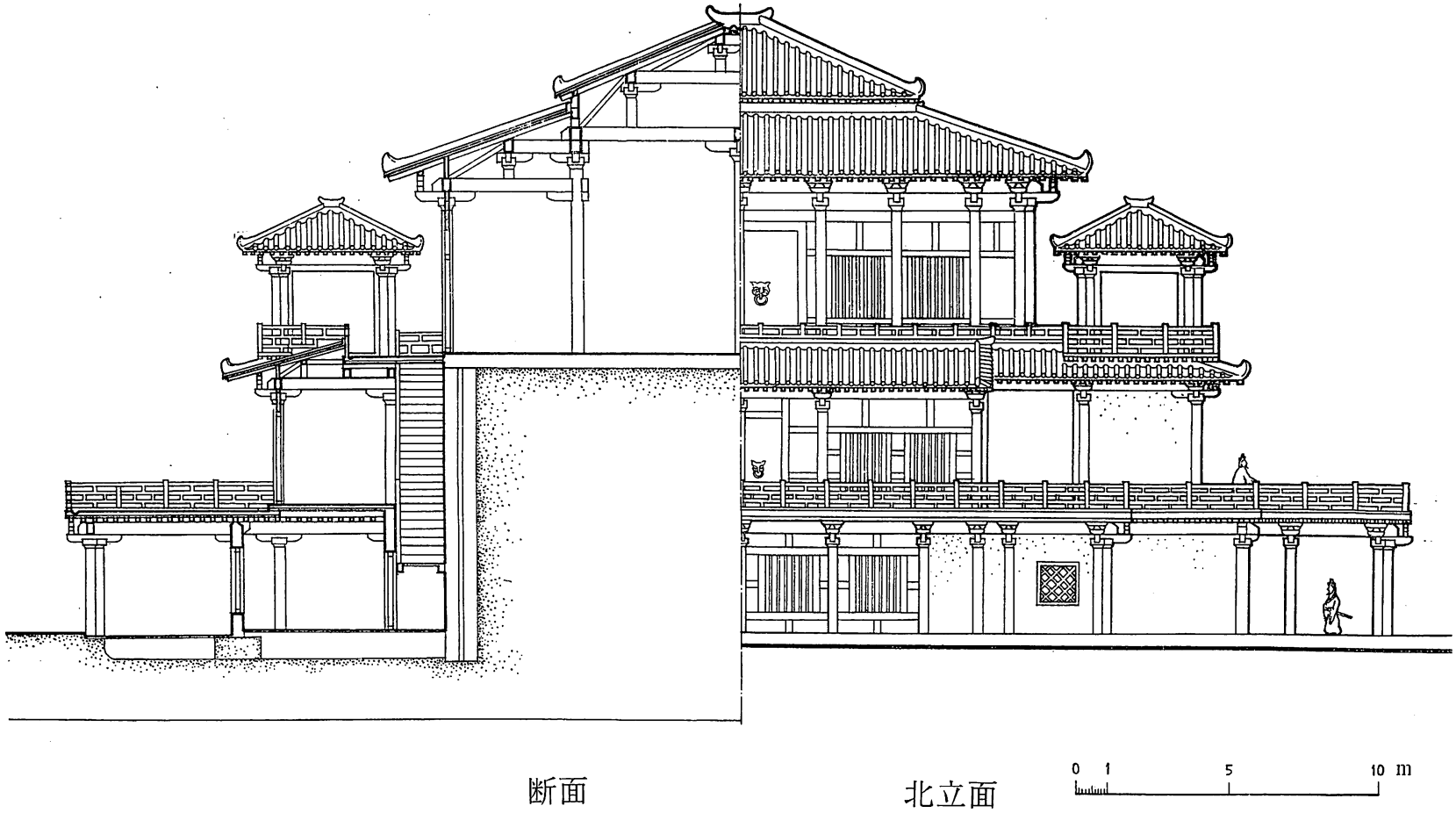

図7　前漢長安城南郊の礼制建築の中央建築の復元断面図

前漢以降に政治思想となった陰陽五行説が建築上に具現したものとみられる。[5]

四　結　言

「長生無極」等の吉祥文瓦当は前漢の長安城未央宮[2]より、「衛」字瓦当は未央宮南西角楼[3]より、そして四神の図象文瓦当は、前漢の長安城南郊の礼制建築群よりの出土が報告[1]されている。さらに南郊礼制建築群D6F3よりは「上林」字瓦当の出土も報告[1]されている。上林苑は周知のように秦漢時代の庭園であり、南郊礼制建築群は上林苑に含まれるから当然のことである。

瓦当出土についての数量的情報は報告されていないので残念である。一般的に雲文瓦当が最多出土であり、葵文等の瓦当がやゝ多く、吉祥文瓦当は少なく、四神等の図象瓦当は極めて少なく稀少例と言えよう。

これらの事情を勘案し、前漢長安城の瓦当は雲文瓦当や葵文瓦当が一般的に多く用いられ、吉祥文瓦当は重要な要所に使用され、四神瓦当等の吉祥図象瓦当は極めて枢要な意義のある個処にのみ掲げられたと推考される。

本瓦当試料の出土地について考察しよう。四神瓦当試料は前漢の長安城南郊の礼制建築群より出土したと考えられる。「衛」字瓦当試料は前漢の長安城未央宮の南西角楼にあったと考えられる衛戍関係の役所ないし建物より出土したと推考される。「長生無極」瓦当資料は特定が難しいが、前漢の長安城の未央宮の二号遺址あたりの出土と推考される。

図5・6および7に見られる礼制建築は相当に進歩した整然たるもので、今日の中国建築と比べて著しい遜色はない。前漢時代すでに中国建築はその骨骸をほゞ整えていたと推考される。技術文化の多方面にわたる各分野においても同様の事情であり、中国の技術文化は秦漢時代にほゞその基本的体系を整えていたといえよう。

謝　辞

温かい御高導を賜わった網干善教館長、資料の写真撮影をはじめ行届いた面倒を見て頂いた角田芳昭氏、文献調査に格別の便宜を計られた奥村政博氏に厚く御礼申し上げます。

文献

① 雒　忠如、西安西郊発現漢代建築遺址、考古通訊　一九五七年　第六期　二六頁

② 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊、漢長安城未央宮第二号遺趾発掘簡報、考古　一九九二年　八期　七二四頁

③ 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊、漢長安城未央宮西南角楼遺趾発掘簡報、考古一九九六年三期　二一一頁

④ 唐金裕（中国科学院考古研究所）、西安西郊漢代建築遺趾発掘報告、考古学報　一九五五年　二期　四五頁

⑤ 中国科学院考古研究所編著、杉村勇造訳、新中国の考古収穫、一三一頁、一九六三年十月、美術出版社（東京）

⑥ 建築学大系編集委員会編　村田治郎、建築学大系4Ⅱ東洋建築史、昭三

二初版、昭四七新訂版、彰国社（東京）

⑦ 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊、漢長安城北宮的勘探及南面磚瓦窯的発掘　考古一九九六年一〇期八八七頁

⑧ 中国社会科学院考古研究所編、中村慎一・小川　誠・来村多加史訳、中国考古学の新発見、一九九〇年八月　雄山閣出版（東京）

⑨ 王世仁、漢長安城南郊礼制建築（大土門村遺址）原状的推測、考古一九六三年九期　五〇一頁

※ 円形瓦当は焼成変形等により真円より変形している。最大直径と最小直径を示した。